

## 「やんばるの森のハブ君」

むかしむかし、みどりゆた 緑豊かな南の島に、みなみ 一匹の気立ての良いハブが住んでいました。いっぴき よ  
ハブは、じぶん 自分の生まれ育った島が大好きでした。う そだ しま だいす

毎朝ハブは、ひ 日の出とともに寝床を飛び出すと、まいあさ 深緑色の森を自由に這い回り、ねどこ だ ふかみどりいろ もり じゆう は まわ  
空を見上げたり、そら 草木の匂いをかいだり、くさき にお おいしそうなトカゲを捕まえたりして、ひび つか  
日々たのしく暮らしていました。ひ

ある日のこと、ハブがサトウキビ畑でのんびり寛いでいると、ある ばたけ くつろ のうみん  
農民がカンカンになって怒りながら歩いてきました。おこ ある のうみん 農民は、かお あお う 顔に青すじを浮かべ  
て、「ちくしょう、ちくしょう」と大声でわめいています。おおいえ

ハブが聞くともなしに聞いていると、どうやら農民は、大切に育て、黄金色に実ったばかりのカニステルを、すべてカラスに食べられてしまったようなのでした。

心やさしいハブは、かわいそうな農民にすっかり同情して、一言なぐさめの言葉をかけようと、農民に近づいていきました。

ハブは農民をあおぎ、何か言おうとしましたが、先に口を開いたのは農民のほうでした。

「おい、へビが何をしに来たんだ。腹が減って、カラスが食い散らかしたカニステルのカスでも拾いに来たのか。それとも、つぶれた饅頭のようなその顔を、もつと平べったくきれに来たか」

と言うやいなや、足でハブの頭を踏みつぶそうとしましたので、びっくりしたハブは、農民から全速力で逃げました。

このハブは、ふだんはおっとりしていますが、農民のうみんからの仕打ちしうちには怒りをおぼえて、それから何日も何日も、目をキツと吊り上げて、頬ほほをふうつと膨ふくらせたまま、すごしていました。

ある日ひ、のどがかわいたハブは、水みずを飲もうと池いけに顔を近づけて、水面すいめんに映うつた自分の姿じぶんに、「あっ！」と声を上げて、腰こしを抜ぬかしました。

「ボクの顔かおが、ボクの顔かおが・・・」

そこには、以前いぜんの、ふくふくとした丸まるい頬ほほや、つぶらな瞳ひとみのハブの姿すがたは見当みあたりませんでした。

代わりにハブが見たのは、三角さんかくけい形とがに尖とがったエラアゴと、黄色きいろく光ひかる吊つり目めを持つ、いかにも意地悪いじわるそうな顔かおをした、自分じぶんの姿すがたでした。

ハブは心こころに黒くろいものを持つてすごした日々ひびを悔くやんで、ボタボタと悲かなしみの涙なみだ

を流ながしました。ハブの流ながした涙なみだは、ハブのつややかなウロコをひたして地面じめんを濡ぬら  
しました。

しかし、どんなにハブが後悔こうかいしても、ハブの姿すがたは二度にどと元もとに戻もどることはありま  
せんでした。

そうして季節きせつは流ながれていきました。

ある日ひハブは、海うみへ行いつてみようと思おもい立たちました。海うみはあらゆる物じょうかを浄じよう化かし  
てくれるのだと、いつか聞きいた覚おぼえがあつたのです。

生うまれて初はじめて青あおくかがやく海うみを見みたハブは、久ひさしぶりに心こころがうきうきするの  
を感かんじました。

「わあ、海うみって気き持もちの良いいところだなあ。この海うみなら、きつとボクこころの心こころを、い

やしてくれるだろう」

ハブは白い砂浜いっぱいに広がる、浜ヒルガオの群生を見つけると、その葉かげに横たわりました。

ハブは目をつむり、寄せてはかえす波のリズムに、そっと息を合わせました。

「すう、はあ。すう、はあ」

ハブは何度も呼吸をくり返すうちに、だんだん心が落ち着いていくのを感じました。

農民への怒りや、自分の姿が変わってしまった悲しみも、すっかり溶け去ったことに気がついたハブは、ゆっくりと目を開けました。

ずいぶん長い時間が経っていたようです。高く昇っていた太陽は、いつの間にか半分ほど海に沈み、海の色もあかね色に染まっています。ハブの身体をすり抜けて

いく潮風しおかぜも、ずいぶん冷たくつめなっています。

「すっかり気分きぶんが晴れたことだし、そろそろ帰ろうか」

ハブは横よこたえていた体からだをおこして、もと来た道みちを引き返かえしはじめました。

ちようどそのとき、漁りようを終おえたばかりの若い漁師わか りようしが、ハブのいる岸きしべ辺べにやってきました。

この日は漁師ひ りようしにとって、とても嫌いやな一日いちにちでした。

漁師りようしは朝あさ早くから漁りように出でたのですが、漁りようは一匹いっぴきもとれないうえ、間違まちがって釣つり上げたハリセンボンあにびゅうつと墨すみをかけられ、逃にげられてしまったのです。

そんな事情じじようを知らしないハブは、漁師りようしとすれ違ちがいざまに、いい気分きぶんでほほ笑えみましました。

するとそれを見た漁師は、

「いま、俺のことを笑いものにしたな！」

と、顔を真っ赤にさせてハブをにらみました。漁師は、ハブに墨だらけの顔を笑われたのだと勘ちがいましたのです。

あたりはだいぶ暗くなっていたので、ハブには漁師の汚れた顔など見えなかったのですが、ふんぷんに怒った漁師は、魚網を手にとると、あつというまにハブを捕まえてしまいました。

「わっはっは。いまましいハブめ。お前を酒屋に売りつけてやる。俺をわらつたやつはハブ酒にでもされてしまえ！」

漁師は、ハブの入った魚網を引きずりながら、町のほうへ歩き出しました。

ハブはせまい網の中で、バタバタあばれて、網に小さなほころびがあるのを見つ

けると、ほころびをやっとくぐりぬけて、命いのちから逃げ出だしました。

「はあ、はあ。人間にんげんってやっぱり恐こわい生き物いものだ」

さっきまで海うみで感かんじていた、心こころの静しずけさは、どこかに消きえて、ハブのウロコか  
らは、冷汗ひやあせが後あとから後あとから流ながれています。

「どうして人間にんげんはボクを嫌きらうんだろう。ボクは悪わるいことなんて、何なにもしていない  
のに」

こうして、ハブは人間にんげんに心こころを閉とざすようになりました。そしてハブが人間にんげんから受う  
けた心こころの傷きずは、どんどんハブのお腹なかにたまって、ついにハブは毒どくへビになってし  
まいました。

それからハブは人間にんげんを避さけて暮くらすようになりました。ハブは琉球りゅうきゅう石灰岩せつかいがんのす

き間まをみつけると、その中なかへ入り込んで、じつと身みをかくしていました。

そこは、やんばる一いちの長者ちやうじやが住すむ、屋敷やしきの石垣いしがきでした。

この家の長者いえ ちやうじやはお金儲けかねもうに忙いそがしく、つねづね猫ねこの手も借てりたいと思おもっていました。

ある朝あさ、屋敷やしきの使用人しようにんが石垣いしがきに潜ひそんでいるハブを見みつけました。

「だんなさま、こんなところにハブが棲すみついています」

それを聞きいた長者ちやうじやは、さつそく庭先にわさきに出向でむいて、ハブに話はなしかけました。

「お前はまえワシの屋敷やしきに勝手かってに棲すみついているハブだそうだが、ニヨロニヨロしているばかりで何なんの役やくにも立たっていないようじゃな。ワシはとにかく忙いそがしくて、ハブの手てでもいいから借かりたいくらいなんじゃ。お前まえ、ワシの屋敷やしきに居座いすわるのなら、そこから出でてきて、うちで働はたらかんか！」

「とんでもない、と思ったハブは、焦あせって石垣いしがきの奥おくに逃にげこもうとしましたが、  
長者ちやうじやはハブの尻尾しつぽをぎゆうつつつかむと、無理むりやりハブを引ひつ張ばり出だしました。  
ハブは、連つれて行いかれてなるものかと、とつさに長ちやうじや者をガブリとかんでしま  
いました。」

「うわあ！」

長ちやうじや者は一ひ声叫こえなげぶと、泡あわを吹ふいて、そのままばったり倒たおれました。

ハブは、自じ分の腹はらに猛毒もうどくが溜たまっていることを、このときはじめて知しりました。

ハブは長ちやうじや者を殺ころめてしまったことを後悔こうかいしましたが、すべてはあとのまつりで  
す。

「ああ、ボク、何なんてとんでもない事ことをしてしまったんだろう。もうお天道てんとうさま様に顔見かおみ  
せすることも、恥はずかしくて出来できないよ」

そう言いって、ハブは大粒おおつぶの涙なみだをこぼしながら、やんばるの奥深おくふかくへと消きえていきまきました。

こうして今いまでは、お天道てんとうさま様を避さけて夜行性やこうせいとなつたハブと人間にんげんとは、滅多めったに出会であうこともなくなりまきました。

しかしハブと人間にんげんは、今いまもお互たがいを忌いみ嫌きらい合あつていまいます。

ハブは人間にんげんと出でくわすと、びゅつと長い胴ながを伸のばして飛とびかかかり、人間にんげんはといいうと、山やまに分わけ入いるときには必かならずハブ棒ぼうを持もち歩あるき、ハブの三角頭さんかくあたまを捕とらえようとするのです。

どうやらハブと人間にんげんの争あらそいは、これからも続つづいていきそそうです。

(佐藤さとう 允美まさみ)